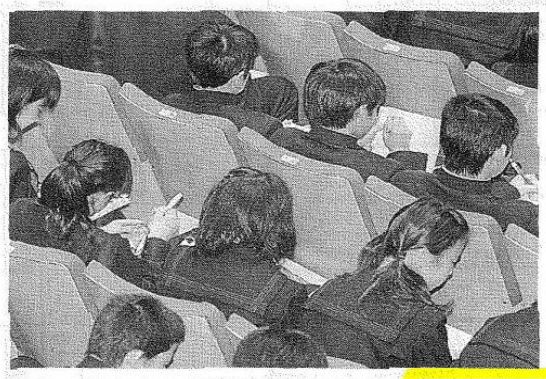
教育

選ばれる学校②　公立一貫校の求める子

「型にはまった解答要らない」

公立の中高一貫校の適性検査（入試）は対策が立てにくいといわれる。どんな子が受かるのか。その勉強や生活ぶりから、公立一貫校の求める生徒像が透けて見える。（上野創、冬木滋）



【公立中高一貫校の適性検査出題例】（要旨）
◇夏目漱石の俳句「どっしりと尻を据えたる南瓜（かぼちゃ）かな」が表現している南瓜の特徴を説明させる。また、ほかの野菜の特徴を俳句で表現させる（東京都立白鴎）
◇米英仏日など国別の食糧自給率のグラフを提示。日本の自給率が低いとどんな問題が出るか、考えて書く（和歌山県立3校共通）

【公立一貫校　受検者の横顔】
受検を考え始めた時期…「小5」が多数派
受検準備を始めた時期…「小6」が多数派
受検を考えた理由…「高校受験がない6年一貫教育のメリット」が最多
（学研「公立中高一貫校に入る！」編集部による）

私立・国立の入試にあたる公立一貫校の「適性検査」＝表に出題例＝は、「どの教科と断定できない複合問題を意図して出している」（学習塾「スクールETC」若泉敏代表）のが特徴だ。

京都府立洛北高付属中の沖田悟傳副校長は、生徒に求める力の例としてコンパスと定規と鉛筆だけで図形や立体を作るよう方角を挙げた。「コンパスで円を描く、定規で長さを測る以外の使い方ができる子は、生活体験の中でそういう力が育っている」。問われるのは「受験技術よりも、家庭学習の中で身につく力」（ベネッセ）と教育業界もみる。

具体的には家でどんな勉強ができるのか、洛北高付属中に長女が通う母親は「人の死や環境など、様々なテーマで親子で話をするのが大事」と振り返る。

「身近な話題で疑問を持ったり、答えを探したりする」と作文や面接で指導が出てくる」

西日本の公立一貫校に娘が受かったある中学校教師は教え子への高校受験指導は経験を応用した。

「経験上、子どもの集中力がもつのは3カ月、小学生なら、せいぜい2カ月」。

そこで、適性検査の2カ月ちょっと前、ドライブで神社へ合格祈願に出かけた。それまで毎週のようにドライブに行っていたのを、「秘策」です」

合格者の偏差値、幅広く分布

公立一貫校の合格者について、進学塾の模試偏差値を見ると、上下に幅広く分布しているという。偏差値の併願が少ない。が、先々実績が出れば、私立受験組で結果的に公立一貫校に来るという子が増える可能性がある」と話す。そうなっても、公立一貫校は学色を保てるだろうか。

受験技術より問われる家庭学習

東京都立両国高校付属中学校の適性検査の日、校門に塾の先生たちが「花道」を作っていた。塾生を激励する儀式。それを、江東区のある母親（40）は「両国中の先生たちかな」と勘違いした。

娘は塾に行かせなかった。受検対策は2カ月に1回、作文の通信添削講座だけ。お受験ママではなかったのだ。

娘は毎朝7時半からの吹奏楽部の朝練を欠かさなかった。

「学校行事は全部参加しました」。その思い入れの深さは、検査当日に小学校最後の社会科見学が重なったのを、「入試で行けないなら」と勘違いした。日程をずらせませんか」と小学校にかけ合ったほどだ。

広島県尾道市立高小学校から、やはり中高一貫の県立広島中学校に合格した男の子も、ソフトボールやサッカー、学校が力を入れる太鼓などの課外活動の練習が、毎日あった。

6年生の前半は児童会の役員を務め、運動会であいさつした。県の催しで1500人を前に太鼓を実演する経験もした。

「太鼓やスポーツを通じて、人前でも自分の意見が言えるようになっていた。広島中は面接の配点が高いと聞くので、積極的に校に立ったかも知れない」。会社経営の父親（44）がそう話す。

勉強だけでなく、学校行事にも熱心。小学校で学級の中心にいる子は、公立一貫校が求める生徒像に重なるのだろうか。

都立小石川中等教育学校の遠藤隆一校長はこう話している。「リーダーになれる子を育てたい。受検対策をやって、型にはまった解答を書く子は要らない。独創的な答えを書ける子がほしい」

「合格前はこれが最後。今から勉強」と切り替えた。

それから、国語の長文を1日1題ずつ。試験までに100題近く解かせた。解説文が長い問題集を選び、「問題を解く時間より、解説を読む時間を長く」と教えた。「高校入試指導での

「公立中でこんなに部活をやるべきか」

「やりすぎ多い」医師が警鐘

Re:

秋田市立中学に通う2年生男子生徒の母親からハードすぎる部活に疑問を投げかける手紙が届いた。

「陸上部の練習が連日遅くまであり、夏は午後7時ごろまで学校にいます。疲れて果てて帰宅し、夕飯などを済ますと寝るだけ。土日もつぶれます。公立中でこんなに部活をやる必要があるのでしょうか」

同じ学校の女子生徒の母親は「吹奏楽部も大変。他県に引っ越した人によれば、秋田は特に大変らしい」とのこと。転勤で秋田市から転出した親に聞いてみると、「早く帰ってくるようになりずっと余裕ができた」（中2、山梨県）、「短時間に集中して練習するようになって喜んでいる」（中3、山形県）。

秋田市内の秋田組合総合病院のスポーツ外来担当の整形外科医、石沢鳴浩さんは05年、市内の中学生にアンケートをし、主に部活で運動をしている1355人の回答を分析した。1日の練習時間は約75%が2時間以上、27%が4時間以上、94%が「週に5日以上」、半数が「家に帰っても疲れる」、6割が「体に痛みがある」と回答した。

「秋田も学校によって違うが、中学生としては、やりすぎの学校が多いことがよく分かった。この年代は体格差が大きいのに、一律の練習メニューではけがが多くて当然です」と話す。

ただ、部活に多くの時間を割くのは秋田市だけの傾向ではない。

文部科学省の「運動部活動の実態に関する調査研究協力者会議」が01年、調べた結果、中学校で週6日以上活動している例が64%あり、時間も「2~3時間」が47%、「3時間以上」が13%だった。「休養日を定めている」のは約6割だったが、土日の活動を「どちらも認めている」との回答も6割だった。

文化系の生徒から厳しい部活への疑問が寄せられている。茨城県の公立中学2年の女子生徒は吹奏楽部の部活で毎日疲れ切っているという。「朝練や長時間の練習でほかのことをする余裕がない。風邪でも休みにくく、つらい。でも、やめると友達や先輩との関係が悪くならないか心配」

元公立中学教諭で教育評論家の尾木直樹さんは「部活は充実感を共有したり、自己肯定感が増したり、良いことも多い。だが、生活が部活のみになる危険もある。思春期に様々な経験をし、自分としっかり向き合う時間がないと、自立心も育たない」。

少子化で教師の数が減る中、部活は教師にとっても負担が大きい。「時間を短くするか、地域の受け皿を作って活用するべきだ」と話した。（上野創）

◆

このコーナーは、読者のみなさんの投稿をもとに記者が取材し、随時掲載します。

あなたの意見・疑問をお寄せください
〒104-8011　朝日新聞教育班、FAX 03-3542-4855、メール education@asahi.com